

2016年1月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

現代に伝えられた仏教

1. 概要

釈迦牟尼世尊のご入滅の直後、釈迦牟尼世尊の教えを、正しく後世に伝えるために、経典の編纂がなされました。それによって、仏教は現代にまで伝えられてきたのです。

その動機、経緯と、現代から見た意義について、増谷文雄編訳『阿含経典1』（ちくま学芸文庫）の総論を中心に、学んでみたいと思います。

2. 第一結集の動機

弟子たちが結集（教えの確認と編集）をすることになった動機について、増谷文雄博士は、次のように述べています。

(1) マハーカッサパの危機感

① 「釈尊がクシナーラー（拘尺那羅）の郊外で亡くなられて間もなくのこと、釈尊の一行よりすこし遅れて旅していたマハー・カッサパ（摩訶迦葉）たちの一行は、むこうからやってくる一人の外道によって、釈尊の訃報を知った。彼らの驚きと悲しみとは大きかった。

しかるに、その一行のなかに一人の老いたる比丘があり、大声をあげて、思いもよらぬ暴言を吐いたという。

『友だちよ、憂うるなかれ悲しむなかれ。われらはいまやかの大沙門から脱することを得たのである。かの大沙門は、このことは汝らにふさわし、このことは汝らにふさわしからずと、われらを悩ましたのであったが、いまや、われらは、欲することはな(為)し欲せぬことはしないでよいのだ』」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫p.027、『同3』p.487、p.501～503）

② この老いたる比丘は、仏の教えを学びながら、これを窮屈に思い、釈迦牟尼世尊がご入滅になったのだから、もう、教えを守らなくてもいいと考えたわけです。

この言葉を聞いて、マハーカッサパは危機感を覚えたと思われます。

(2) 自ら不幸への道を選ぶ

ビジネス縁起観塾でも、この老いたる比丘と同じような人に数多く巡り合いました。

ビジネス縁起観では、真理から外れやすくなっている自分を、真理に沿って生きる自分に切り替えることをお勧めします。一口で言えば、自分を変える修業をすることです。ところが、研修を聞いて、自分を変えなければならないと分かった途端に、出席しなくなるのです。

この人たちは、貪欲・瞋恚・愚痴の人生を選んでいるのです。機が熟して、どこかで再び仏教に触れる日が来ることを、祈るほかありません。

(3) 欲することはな(為)し欲せぬことはしない

- ① 「欲することはな(為)し」の言葉からは、例えば、次のような人びとの姿が思い浮かびます。
 - ・欲望の赴くままに行動する
 - ・気に入らないと言っては、怒りまくる
 - ・自分さえよければ、他はどうなっても構わないという思想で行動する
 - ・歪んだ信念から、人々を平気で傷つける
- ② 「欲せぬことはしない」の言葉からは、例えば、次のような人々の姿が思い浮かびます。
 - ・自分の得になると思うと近寄るけれども、得にならないと思うと逃げる
 - ・嫌いな仕事には背を向けたり、他の人に押し付ける
 - ・約束、ルール、法令などを守ろうとしない
 - ・自分の欠点を改めようとしない

3. マハーカッサパの提案

「そのとき、マハー・カッサパは、ただ黙ってそれを聞いていたが、やがて釈尊の遺骸のあと始末なども終わったとき、彼は、仲間の比丘たちに呼びかけていった。

『友だちよ、われらはよろしく、教法と戒律を結集して、非法おこりて正法おとろえ、非律おこりて正律おとろえ、非法を説くもの強く、正法を説くもの弱く、非律を説くもの強く、正律を説くもの弱くならん時に先んじようではないか』

そのという意味はほかでもない。やがて、正しい教法がみだれ、正しい戒律がおとろえる時が来るにちがいない。われらは、それに先んじて、正しい教法と戒律を結集しようではないかと提言したのである。彼らは、ただちにその提言に賛成した。」

(増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫p.027～028、『同3』p.501～503)

4. 正法・像法・末法

ここを読みますと、正法・像法・末法を思い出します。庭野日敬師は次のように語っています。

「お釈迦さまは、ご自分が入滅されたのちの時代を正・像・末の三つに分けて、仏の教えが正しく守られる時代（正法）、仏法が形のうえだけのものになってしまう時代（像法）、そして、ついに仏法が見失われてしまう時代（末法）がやってくると申されております。その末法の時代は、人びとが自分の利益、自分の仲間や自分の国の利益にあくまでも固執し、その利害の衝突でいがみ合い、ついには多くの血を流すようなことが起こる時代です。また、自分の欲望を満足させることしか考えずに地球を汚染しつくし、破壊しかねないような時代、それが末法の時代なのです。」

(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.3～4)

5. 現代の様相

現代の世の中を見回せば、「非法おこりて正法おとろえ、非律おこりて正律おとろえ、非法を説くもの強く、正法を説くもの弱く、非律を説くもの強く、正律を説くもの弱く」が、現実となっているといわざるを得ません。

このような時代だからこそ、正しい教法と正しい戒律に目覚めたいものだと思います。そのためには、正しい教法、正しい戒律を知る手掛かり(例えば経典)が身の回りにあることが必要です。マハー・カッサパは、そのために仲間の比丘たちに呼びかけたのでした。

庭野日敬師も、前項の言葉に続けて、次のように語っています。

「今こそ、まさしく末法の時であり、人間が真の人間の生き方に目覚めなければならない時なのです。それでなければ、この世界を救うことはできません。その真の人間の生き方が、法華経に示された菩薩の生き方です。」(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.4)

6. 経典の編集

仏教の教えが経典として編集された経緯について、庭野日敬師は、次のように説明しています。「釈尊が入滅された年(翌年という説もある)の雨期に、五百人の高弟が、王舎城外の『七葉窟(しちようくつ)』という所に集まり、約七か月にわたって、ご一生に説かれた教えを編集しました。

といっても、文字で書きつづるのではなく、代表者(誦出者(しょうしゅつしゃ)という)が自分が記憶しているとおりを口で唱え、みんなが、それを聞いて正確であるかどうかを確かめ合い、満場一致で正確であるとなったら、一同でそれを合誦(がっしょう)し、頭に記憶したのです。そのころのインド人の記憶力は実にすばらしいものがあり、文字にしるすのと変わりはありません。

このような経典編集の会議を『結集(けっじゅう)』といい、その後も数回それが行なわれたということですが、なんといっても、この第一回の王舎城結集が、あらゆる仏典の基礎をなす重大なものだったことはいまでもありません。

その会議で、律の誦出者には優婆離(うぱり)が、法の誦出者には阿難(あなん)が選ばれました。誦出者は『わたしは、確かにこのように聞きました』と前置きをし、その教えを唱えましたので、漢訳経典にも『如是我聞(にょぜがもん、是の如きを我聞き)』という文句で始まるお経が多いわけであります。

そうして口から口へと伝えられた経典が、文字にしるされるようになったのは、仏滅後二百年ないし三百年くらいたってから後のことと伝えられています(以下略) 」

(庭野日敬著『仏教のいのち法華経』佼成出版社、p.213~214)

7. 経名の意味

「阿含経」という経名の意味について、増谷文雄博士の説明があります。

「ここに一つの経の集録がある。かつて中国における訳経僧たちは、それらを翻訳するにあたって、『阿含(あごん)』をもってその経題とした。それは、その経の集録の原名『アーガマ』(Āgama)を音写したものであった。

その『アーガマ』とは、『到来せるもの』とか、『伝え来れるもの』とかいうほどの意味のことばであって、それによって『伝来の経』を意味しているのである。その音写としては、その他にも、『阿笈摩(あぎゅうま)』とか『阿迦摩(あがま)』などの音写も見受けられるが、経題としては『阿含』が一般的にもちいられている。」(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.017)

8. 教えの広まりと経典の編纂

(1) 阿含経典

先に述べた第一回目の結集(「第一結集」「王舎城結集」「五百結集」と呼ばれています)をもとにして、釈迦牟尼世尊の教えが広まり、多くの経典が書き表されました。その間に、幾多の変化、増大、付加、再編集が行なわれたと推察されます。

こうしてなった経典群が「アーガマ(Āgama、阿含、伝来の経)」と呼ばれています。

(2) 漢訳阿含経典とパーリ経蔵

増谷文雄博士によれば、漢訳の阿含経典とパーリ五部と呼ばれる経典がアーガマであり、両者にはほぼ、次表のような対応関係があるということです。(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.045~053)

漢訳の阿含経典			パーリ五部		
中阿含経	60巻	224経	Majjhima-nikāya	中部経典	152経
増一阿含経	51巻	472経	Aṅguttara-nikāya	増支部経典	11集 9557経
長阿含経	22巻	30経	Dīgha-nikāya	長部経典	34経
雑阿含経	50巻	1362経	Saṃyutta -nikāya	相應部経典	56相應 7762経
			Khuddaka -nikāya	小部経典	15分

(3) 増谷博士の研究

増谷文雄博士は、これらの経典の中から、長年にわたる変化、増大、付加、再編集のあとを見極めて、信頼のおけるもののみを抽出しました。

これらをまとめたものが、増谷文雄編訳『阿含経典1～3』（ちくま学芸文庫）です。

9. 令法久住のよびかけ

(1) 釈迦牟尼世尊の呼びかけ

妙法蓮華経見宝塔品で、釈迦牟尼世尊は、弟子たちに「令法久住(りょうぼうくじゅう)」の呼びかけをしました。

「もろもろの弟子たちよ。だれがこの教えをよく護ってくれますか。いまこそ大願を起こして、この教えを未来永劫にのこしてほしいものです。もしこの法華経の教えをよく護ることのできる人があったならば、それがそのまま、わたしと多宝如来を供養することになるのです」

(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 117)

(2) 令法久住の意義

妙法蓮華経には、教えを見失った人々の中で、自ら教えを理解し、実践し、人々を教えに導くことの大切さが、繰り返し説かれています。

そのためには、教えが身近にあることが必要です。人々の手元に教えがあるようにすることが、令法久住の目的でありましょう。

令法久住の呼びかけは、結集のきっかけとなったマハー・カッサパの呼びかけと軌を一にしていると思います。

(3) 布教の段階

釈迦牟尼世尊による教えの布教は、少なくとも三つの段階を考えることができます。

第一段階は、初転法輪です。初めて教えを説くとき、釈迦牟尼世尊は、相手を慎重に選ばれました。

第二段階は、伝道の勧めです。煩惱から解脱した修行者が釈迦牟尼世尊も含めて61人になったとき、弟子たちに、多くの人びとのために教えを説き示すことを勧められました。

第三段階は、令法久住の勧めです。釈迦牟尼世尊亡きあとまで、人びとのために教えを世間にとどまらせることを弟子たちに勧められました。

マハー・カッサパたちによる結集は、令法久住のための努力であるといえます。

(4) 令法久住のための修業

令法久住のために取り組むべき修行として、釈迦牟尼世尊は、妙法蓮華經を学ぶ私たちに、五種法師を示されました。

正行として、教えを信受し、身・口・意に実践（持）する受持。

助行のうち、教えを自ら学ぶ行としての読・誦。

助行のうち、教えを人々に伝える行としての解説・書写。

10. 「ビジネス縁起観」という試み

(1) 宗教と実生活の遊離

先人たちの努力のおかげで、仏教が現代まで伝わっています。

しかしながら、宗教としての仏教は、人びとを救うという意味では壁にぶつかっているように感じます。

仏教を信仰している人びとの多くが、宗教は宗教、生活は生活と分けてしまって、生活や仕事に、仏教が侵透しない傾向が見受けられるのです。

また、いわゆる宗教嫌いの人びとは、教えを聞こうともしないのです。

(2) 宗教ではない仏教

宗教であることが壁になってしまうのであれば、いっそのこと宗教を介さずに教えを伝えたらどうか。そう考えて私たちは、生活者に、生活の場で、生活の言葉で、直接教えを伝える試みを始めました。これが「宗教ではない仏教」のスタートとなりました。

(3) ビジネス縁起観

経営コンサルタントを営むことになった私は、経営者を始めとする働く人びとを対象に、経営・ビジネスのための理論とノウハウを仏教を基盤にして開発し、これを「ビジネス縁起観」と名付けました。

数少ないながら、「ビジネス縁起観」を学び、実践して、現実に成果を生み出す人も現われています。

幸い、友人たちも協力してくれますので、「宗教ではない仏教 ビジネス縁起観」を、これからも推進していこうと思っています。